

原著論文

ラベルを活用したポートフォリオ評価の効果について ー主体的な学習態度を養うー

澁谷 貞子

つくば国際大学医療保健学部看護学科

【要 旨】成人看護学概論の授業でラベルワークを実施した。毎回の授業の最後に自己の学びを記録したラベルで、グループラベル新聞作成をした。グループワークの発表に対して他者評価をしたコメントラベルと、自己の学びのラベルと合わせて、グループラベル新聞を作成した。最終授業ではポートフォリオ評価を導入し、日々の学びのラベルを用いて学びのプロセス図解をし、自己評価をした。ラベルワークでは、学習の方向性を見出し、ポートフォリオ評価を通して主体的な学習態度を養うことと、主にコミュニケーション能力の向上について自己の成長を認識できることが明らかになった。(医療保健学研究 第1号：117-126頁)

キーワード： ポートフォリオ評価；ラベルワーク；主体的な学習態度；コミュニケーション能力

序 論

学士課程教育の構築についての報告で中央教育審議会(文部科学省ホームページ, 2008)は、現代の学生の特徴として、目的意識の希薄化、学習意欲の低下等、学生の多様化により、資格取得に係る教育であっても、バランスのとれた教育活動を行う必要性、及び学生の主体的活動の充実に向けた支援に努める必要性を提言している。

成人看護学概論の授業ではグループワーク

とラベルワークを取り入れ、学生が主体的な学び方を習得し、学ぶことの喜びを体験できるように構築してきた。しかし、評価は認知領域における形成的評価が主になり、精神運動領域である学生個々の主体的な学習態度や学習意欲についての態度面の成長についての評価は不十分であった。

林のラベルワーク技法(林, 2002)を看護学教育へ導入した効果について、研究者らは学習の方向性を見出し(永田と澁谷, 2004)、学生自身が学習の内容の変化を実感し、学びを明確にできること、コメントラベルの活用は、誠実性や責任感等の態度形成に効果的(森田 他, 2006)であったことを報告した。

看護教育における主体性・自主性の評価方法について(田島, 2009)は、ポートフォリオなどの活用過程の資料などに基づいて、学修者の達成感及び満足感、以前より成長しているという

連絡責任者：澁谷 貞子

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-8-33

つくば国際大学医療保健学部看護学科

TEL: 029-826-6622

FAX: 029-826-6776

e-mail: t-shibuya@tius-hs.jp

認識があるかどうかなどを、学修状況の事実にも照らして判断する必要性を述べている。

ポートフォリオが自己教育力を高め、自己の学びを可視化できることで思考の連続に役立つという方法であることは、総合教育や医学教育・看護教育の場面でも報告がなされている。しかし、ラベルワークを活用してポートフォリオ評価を実施しているという報告は見られない。

今回、ラベルを活用したポートフォリオ評価を実施し、学生自らが学びを自覚して主体的に学ぶ方法を理解し、学習を継続する態度を養うために効果的であったとの示唆が得られたので報告する。

ラベルワークとは

林が 1999 年ごろに創始したもので人間の知的活動、とりわけ知識の発信交流及び、知的生産のための図解思考の道具としてラベルを用いる理論と技術の体系である。

ラベル新聞はラベルを使って新聞を作成する。似た意味を持つラベルを合わせて見出しをつける。その過程で出た意見、発見、疑問、課題を記事にすることで、学びを発信するとともに学びを共有することができる。

学びのプロセス図解は自分が書いたラベルを使って、自分が何を体験し、何に気づき、学んだかを整理することで、自分の学びを省察することができる。

ポートフォリオとポートフォリオ評価の歴史

ポートフォリオとは紙ばさみや代表作品選集とも呼ばれ、作品歴や活動歴を指し、バラバラの情報を 1 つにまとめること、作品を一元化することで価値あるものが見えるといわれている方法である。

ポートフォリオ評価とは：知識やスキルなどはテストで数値化できるが、目に見えない力は計ることができない。ポートフォリオは、その

人の個性や能力、感性、課題発見力、解決力など目に見えない力が見える。プラスを見出す具体的な評価であり、プロセスを見る評価である。

ポートフォリオ評価はロンドン大学の S. クラークらが開発した方法で、イギリスでは 1988 年のナショナルカリキュラムの導入以降、多くの学校に取り入れられ活用されている。日本では 1990 年代後半に入って、主に総合的学習の評価として取り入れられた。2005 年頃から医学教育や看護教育の中で注目され、取り入れられている。

対象と方法

対 象

A 大学看護学生 68 名中同意の得られた 65 名 1 年次

研究期間

2008 年 10 月～2009 年 3 月

倫理的配慮

対象者へ研究の目的を説明し、個人が特定できないような配慮をした情報の保護、協力の有無によって成績には影響しないこと、等を口頭で十分説明し、同意を得た。

科目の位置づけ

成人看護学概論は、1 年次後期に開講される 2 単位 30 時間(15 回)の必修専門科目である。

教科目の位置づけと教育方法

成人看護学概論は、看護の対象である成人期の発達段階・発達課題の理解と、成人期における健康保持増進、健康障害の特徴と看護の役割に関することを学ぶ専門科目である。成人のラ

イフステージにおける身体的、心理社会的特徴に対する理解と、ライフスタイルがもたらす健康について学ぶ。さらにA大学看護学生は、学生個々が自己の学び方を習得し、主体的な学習態度を形成する、ということを目指している。

毎回の講義終了時に、参画理論に基づいて開発されたラベルワークの方法(林, 2002)に沿って「今日の学び」をラベルに記録した。ラベルには、主語、述語からなる 30～50 字以内で、1 文を書くという約束事がある。また、ラベルは 3 枚複写になっており、1 枚は個人の学びのプロセス図解用、1 枚はグループでのラベル新聞用、1 枚は教師に提出する。

授業 1 回目には授業の概要とグループワークの方法、ラベルワークの説明、ポートフォリオの説明、2・3 回目には、成人の発達課題に関するテーマでグループワークをし、4 回目はまとめ、授業 5・6・7 回目で生活習慣病予防カルタ作成、8 回目はカルタ取りとまとめ発表、9・10・11 回目には説明指導パンフレットの作成を行い、指導の実際とグループ発表を実施した。12・13・14 回目は講義、15 回目は自分のラベルを用いて授業全部を振り返り、学びのプロセス図解をし、ポートフォリオを作成後自己評価した。

以下図 1 のように毎回の講義後に記録したラベルは持ち回りの係がラベル新聞を作成しメンバーに配布、グループ発表後には、「今日の学び」のラベルとコメントラベルを使用したグループラベル新聞を作成した。最終授業では、各自の学びのプロセス図解を作成し、ポートフォリオを俯瞰しながら、認知・精神運動・情意の各領域を含めた 4 段階の評定尺度を用いた自己評価表のチェック、及び以下の 3 つの設問による自己評価を実施した。

設問の内容は、(1)自分の興味を持っていることが明確になったか(2)自分の足りない部分がわかったか(3)自分の成長した点を 3 つあげて下さいとした。

(1)自分の興味を持っていることが明確になったか、ではカテゴリ『 』と記録単位数〈 〉

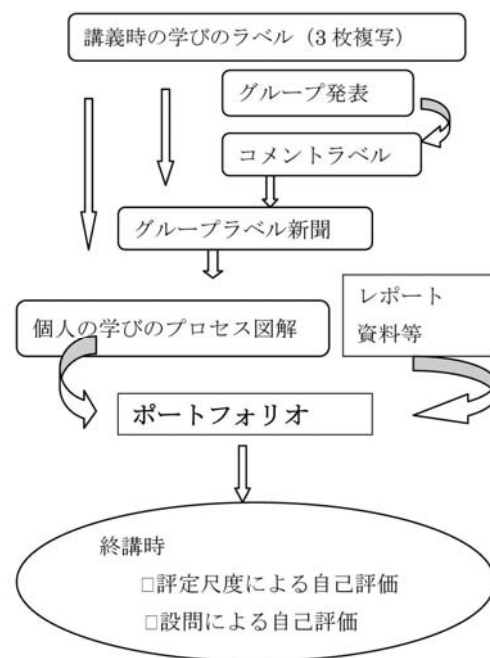


図 1. ラベルワークの進め方とポートフォリオ評価のフローチャート.

で『知識が得られた』〈60〉『健康障害とその対処』〈13〉『今後の看護の展望』〈9〉であった。(2)自分の足りない部分がわかった、ではカテゴリと記録単位で『説明、表現力不足』〈43〉『知識不足・調べ方』〈32〉であった。今回は、記録単位の内容が多彩で、学びが深いとの視点から(3)自分の成長した点について取り上げた。

研究データ及び研究の方法

4 段階の評定尺度を用いた自己評価表でチェックされた学生の割合、及び設問による自己評価の中から、「自分の成長した点を 3 つあげて下さい」に記載された内容を 1 文章、1 記録単位としてカテゴリ化を行い、内容を質的に分析、考察し、分析においてはスーパーバイザー 2 名の協力を得て、信頼性を確保した。

結 果

1) 評定尺度を用いた自己評価は以下の表 1 のようであった。

認知領域では、「授業の目標に到達できた」が、4・そう思うと 3・ややそう思うで 56 名(86.2%) 2・ややそう思わない、1・そう思わないは 9 名(13.8%)。「知識が増えた」では 4・そう思うと 3・ややそう思うで 63 名(97.0%) 2・ややそう思わないは 2 名(3.1%)、1・そう思わないは 0 であった。「学びの方法がわかった」では、4・そう思うと 3・ややそう思うで 54 名(83.1%)、2・ややそう思わない、1・そう思わないは、11 名(16.9%)であった。

精神運動領域の「より多くの人と話せた」では、4・そう思うと 3・ややそう思うで 60 名(92.3%)、2・ややそう思わない、1・そう思わないは 5 名(7.7%)であった。

情意領域では、「自分の役割が果たせた」で、4・そう思うと 3・ややそう思う 56 名(86.2%)、2・ややそう思わない、1・そう思わないは 9 名(13.8%)であった。「学習意欲がわいた」では、4・そう思うと 3・ややそう思う 62 名(95.4%)、2・ややそう思わない、1・そう思わないは 3 名(4.6%)であった。「主体的に学習に取り組めた」では、4・そう思うと 3・ややそう思う 55 名(84.6%)、2・ややそう思わない、1・そう思わないは 10 名(15.4%)であった。「自己の成長が確認できた」では 4・そう思うと 3・ややそう思う 55 名(84.6%)、2・ややそう思わない、1・そう思わないは 9 名(15.4%)であった。

2) 設問による自己評価の中から、(3)自分の成長した点を 3 つあげて下さいに記載された内容を分析した結果は以下の表 2 の様であった。

カテゴリを『 』で、サブカテゴリを【 】で、記録単位を()で、記録数を〈数・%〉であらわす。

記録単位数 182 から、6 つのカテゴリが抽出された。『コミュニケーションがうまくなった』〈42・23.1%〉『GW(Group Work、以下 GW

と略す)の意義』〈34・18.7%〉『考える力・視野拡大』〈20・11.0%〉『意識の変化』〈31・17.0%〉『知識が増え学びの態度が変化した』〈48・26.4%〉『看護観が深まった』〈7・3.8%〉であった。

サブカテゴリは 21 で、『コミュニケーションがうまくなった』のカテゴリの中では【自分の意見を伝えられるようになった】が〈23〉と多く、(自分の考えを伝えることができるようになった)(自分の意見を言えるようになった)(違うと感じたことはちょっと違う様に思ったかなと言えるようになった)などの記録単位で構成された。【他の人とコミュニケーションできるようになった】〈14〉のサブカテゴリでは(説明する際にどうしたら相手が理解しやすいのか考えるようになった)(相手の意見を取り入れるようになった)(他人の意見を素直に聞けるようになった)の記録単位で構成されている。【積極的に参加できた】〈5〉では(発表に際して疑問点を質問できた)(積極的に学習や話し合いに参加できた)などの記録単位であった。

『GW の意義』のカテゴリでは、【GW での役割を出来るようになった】〈14〉で(GW で役割を見つけてきちんとできた)(人の前で発表できるようになった)(協力できた)とできるようになったことを述べ、【GW の意義・役割】〈10〉では、(GW に積極的に参加できた)(GW の大切さがわかった)と、その意義について述べていた。【GW では協力・責任感が大切】〈10〉では、(人と協力することの大切さを学べた)(グループで一緒にやり遂げること)などが記録されていた。

『考える力・視野拡大』のカテゴリでは、【考える力が付き理解が深まった】〈10〉(いろいろな面から物事を考えられるようになった)(他人がどう考えているかと考える力がさらに備わった)など、これまでできなかったことができるようになったと記録している。【視野が広がった】〈5〉では(学習意欲がわき、楽しくなった)(周りを見る視野が広がった)などと記

表 1. 評定尺度を用いた自己評価, %(数), n=65.

	項目	評定尺度			
		4	3	2	1
認知領域	授業の目標に到達できた	7.7 (5)	78.5 (51)	12.3 (8)	1.5 (1)
	知識が増えた	58.5 (38)	38.5 (25)	3.1 (2)	0 (0)
	学びの方法がわかった	15.4 (10)	67.7 (44)	15.4 (10)	1.5 (1)
精神運動領域	より多くの人と話せた	64.6 (42)	27.7 (18)	6.2 (4)	1.5 (1)
情意領域	自分の役割が果たせた	33.8 (22)	52.4 (34)	12.3 (8)	1.5 (1)
	学習意欲がわいた	30.8 (20)	64.7 (42)	3.0 (2)	1.5 (1)
	主体的に学習に取り組めた	32.3 (21)	52.3 (34)	12.3 (8)	3.1 (2)
	自己の成長が確認できた	33.8 (22)	50.8 (33)	12.3 (8)	3.1 (2)

4:そう思う 3:ややそう思う 2:ややそう思わない 1:そう思わない

表 2-1. 設問による自己評価記載(3)自分が成長できた点.

No.	記録単位	サブカテゴリー	カテゴリ
1	人に自分の考えを伝えることが出来る様になった	1. 自分の意見を伝えられるようになった 〈23〉	コミュニケーションがうまくなった 〈42〉 23.1%
2	自分の意見を言えるようになった		
3	自分からコミュニケーションがとれた、身についてきた		
4	自分の考えを速くまとめて書くことが出来るようになった		
5	自分の述べた意見に自信を持てるようになった		
6	違うと感じたことはちょっと違うように思ったかなといえるようになった		
7	他人の意見を素直に聞けるようになった	2. 他の人とコミュニケーションできるようになった 〈14〉	
8	友達と意見交換をするようになった		
9	誰とでも話せるようになった		
10	初めてのひとと話す		
11	いろんな人とグループになって自分の人見知りはまだましとわかった		
12	説明する際にどうしたら相手が理解しやすいのかを考えるようになった		
13	その人が伝えたいこと言いたいことを考えながら話を聞く	3. 積極的に参加できた 〈5〉	
14	相手の意見を取り入れることが出来た		
15	発表に際して疑問点を質問することが出来た		
16	積極的に学習や話し合いに参加できた	4. GWでの役割を出来るようになった 〈14〉 5. GWの意義・役割 〈10〉 6. GWでは協力・責任感が大切 〈10〉	Gwの意義 〈34〉 18.7%
17	GWで役割を見つけてきちんとできた		
18	話し合いの中でみんなの意見をまとめられるようになった		
19	書記が苦手だけどなるべく見やすくてできた		
20	資料作りでみやすくて出来た		
21	人の前で発表できるようになった		
22	協力できた		
23	GWの大切さがわかった		
24	GWに積極的に参加できた		
25	グループで一緒にやり遂げること		
26	自分のやらなければならないものを行う責任感が出来た		
27	人と協力することの大切さを学べた		
28	聞く力を身につけようと思った		
29	GWでたくさんの意見を聞くことが出来た		
30	色々な面から物事を考えられるようになった		
31	考える力が向上させられた		
32	色々な疾患について深く考えられるようになった		
33	問題に対して「どうしたらいいか」考えることができた		
34	他人がどう考えているかと考える力がさらに備わった		
35	他の授業と関連付けて考えられる様になった		
36	患者に対する理解が深まった		
37	周りを見る視野が広がった		
38	考えが広がった。		
39	学習意欲がわき、楽しくなった		
40	要点を絞ることが苦手だったが、コツが見えてきた		
41	必要な情報の選択		
42	情報の整理		
43	まとめる力がついた		

〈 〉 内は記録単位数

表 2-2. 設問による自己評価記載(3)自分が成長できた点.

No.	記録単位	サブカテゴリー	カテゴリ
44	人の意見を踏まえて自分の意見を持つこと	10. 自分の意見を持つ 〈1〉	意識の変化 〈31〉 17.0%
45	人とのつながりの大切さがわかった	11. 人とのつながりを深く考 〈4〉	
46	プラスしていく力やわらかく吸収していく力		
47	真剣に考えるようになった	12. 価値観の違いがわかつた 〈4〉	
48	自分と他人の価値観の違いを知ったこと		
49	自分にはないものを持っている人がたくさん居たからプラスになった	13. 物事に対する見方が変 〈4〉 ⁺	
50	今の自分に足りないものを見つけることが出来た		
51	死についての考え方が良い方向に変わった	14. 患者家族の立場で考える 〈5〉	
52	家族を思いやることの照れがなくなった		
53	植物人間に対する見方が変わった	15. 健康に対する意識が変わった 〈5〉	
54	1つの病気について多方向から見るできるようになった		
55	遺族について考える	16. 思いやり・感謝の気持ち 〈8〉	
56	患者さんの気持ちになって物事を考えるようになった		
57	パンフットの説明を受けることで患者さまの気持ちに近づく ことができた	17. 知識が増えた 〈18〉	
58	生活習慣について見直そうと思ったこと		
59	自分や周りの人間への健康に対する意識が変わった	18. 学びの態度 〈11〉	
60	健康に気をつけようと思った		
61	日々の生活の中で食事や運動に気をつけるようになった	19. 調べ方の変化 〈11〉	
62	自分の周りの人の大切さ		
63	患者さんに対する思いやりの心を成長させることが出来た	20. ラベルでの学び 〈9〉	
64	思いやりができた		
65	友達が増えた	21. 看護の深まり 〈7〉	
66	遺書を書いたことで人生を振り返り今まで以上に感謝すること		
67	痛みについて理解しようとする	看護観が深まった 〈7〉 3.8%	
68	生きることの大切さがわかった		
69	知識が増えた		
70	いろいろな援助方法があること	知識が増え学びの態 度に変化した 〈48〉 26.4%	
71	エイズの患者さんと取り巻く家族の状況について理解が深まった		
72	発達課題やエイズについての知識が身についた		
73	本をたくさん読んでもっと知識を増やそうと思った	18. 学びの態度 〈11〉	
74	かるたづくりなど		
75	生活習慣病の予防方法がわかった。		
76	生活をしていく上ではいけないことがわかった	19. 調べ方の変化 〈11〉	
77	自分の生活を見直すきっかけになった。		
78	プリントをきちんとファイルし活用することが出来た		
79	1つのことを最後までやりぬこうとする意欲	20. ラベルでの学び 〈9〉	
80	授業にしっかり取り組めたこと		
81	疑問に思ったことを調べないとむずむずするようになった		
82	授業で考えたことをメモするようになった	21. 看護の深まり 〈7〉	
83	予習して授業に取り組めた		
84	課題は残さずやろうという気になった		
85	創作意欲の発揮	看護観が深まった 〈7〉 3.8%	
86	提出物をきちんと出したこと		
87	知らない言葉が出たら自分で調べる		
88	興味の持てたことを深く調べるようになった	知識が増え学びの態 度に変化した 〈48〉 26.4%	
89	誰かに説明できるまで物事を調べたいと思うようになった		
90	なんとなく絵が上手になったような気がする		
91	デザイン力がついた	18. 学びの態度 〈11〉	
92	みんなの学びをまとめること		
93	ラベル新聞が書けるようになった		
94	1回の授業内で学習したことをすぐ復習できるようになった(ラベル)	19. 調べ方の変化 〈11〉	
95	ラベル新聞をしたことでまとめる力がついた気がする		
96	自分の興味のある分野がわかった		
97	看護について自分の考えが出てきた	20. ラベルでの学び 〈9〉	
98	看護について今まで以上に興味を持てた		
99	自分の看護観を見つけた		

〈 〉 内は記録単位数

録し、【情報の整理ができるようになった】〈5〉では(必要な情報の選択)(要点を絞ることが苦手だったが、コツが見えてきた)などと記録している。

『意識の変化』のカテゴリでは、【自分の意見を持つ】〈1〉(人の意見を踏まえて自分の意見を持つ)【人とのつながりを深く考える】〈4〉では、(プラスしていく力ややわらかく吸収していく力)(真剣に考えるようになった)などと変化を記録している。【価値観の違いがわかった】〈4〉では、(自分にはないものを持っている人がたくさんいたからプラスになった)(自分と他人の価値観の違いを知ったこと)と記録している。【物事に対する見方が変わった】〈4〉では、(家族を思いやることの照れがなくなった)(植物人間に対する見方が変わった)など話し合いから得られた記録である。【患者家族の立場で考える】〈5〉では、(患者さんの気持ちになって物事を考えるようになった)(遺族について考える)などと記録している。【健康に対する意識が変わった】〈5〉では、(生活習慣について見直そうと思った)(自分や周りの人間への健康に対する意識が変わった)と変化を自覚し、【思いやり・感謝の気持ち】〈8〉では、(自分の周りの人の大切さ)(遺書を書いたことで人生を振り返り今まで以上に感謝すること)などの記録が見られた。

『知識が増え学びの態度が変化した』のカテゴリは4つのサブカテゴリで構成されている。

【知識が増えた】〈18〉が多く(いろいろな援助方法があること)(発達課題やエイズについての知識が身についた)(本をたくさん読んでもっと知識を増やそうと思った)などと記録している。【学びの態度】〈11〉では、(授業で考えたことをメモするようになった)(課題は残さずやろうと思ったこと)プリントをきちんとファイルし活用することができた)と記録している。【調べ方の変化】〈10〉では(興味をもてたことを深く調べるようになった)(知らない言葉が出たら自分で調べる)など、変化を記録していた。【ラベルでの学び】〈9〉では(ラベル新

聞が書けるようになった)(デザイン力がついた)(なんとなく絵が上手になったような気がする)であった。【看護観が深まった】〈7〉では、(自分の興味のある分野がわかった)(自分の看護観を見つけた)(看護について今まで以上に興味を持てた)などであった。

考 察

1) 評定尺度を用いた自己評価の結果で、認知領域の「授業の目標に到達できた」が7.7%と低いのは、授業の目標を理解していなかったのではないと思われる。これは、開講に当たってシラバスの説明と、自己の目標設定に関する説明不足であったことが考えられる。今後は、自己の目標について認識できるように説明を繰り返し、より主体的な学習態度を形成する必要があると考える。「知識が増えた」は4・そう思うと3・ややそう思うで、63名(97.0%)であり、授業の目標が達成されたと考える。「学びの方法がわかった」では、4・そう思うと3・ややそう思うで54名(83.1%)2・ややそう思わない、1・そう思わないは11名(16.9%)であり、この領域の中では評価が低かった。学びの方法の内容をもっと意識づける必要がある。

精神運動領域では評価が最も高く、「より多くの人と話せた」では、4・そう思う、と3・ややそう思うを集計すると92.3%であった。この授業の中でのグループ分けの工夫や、ラベルを用いて話すラベルトークの効果と考える。話すことの苦手な学生は、あらかじめラベルに記録してから話すことで、内容を整理でき、緊張を緩和して、話すことができた結果と考えられる。

情意領域の評定尺度で、「自己の成長が確認できた」を4・そう思う、3・ややそう思うと肯定的に自己評価できた学生が55名(84.6%)であったことは、学びのプロセス図解という凝縮ポートフォリオを作成していく過程で、自己の取り組みの過程を可視化でき、客観的に自己

評価できた結果であると考え。「ポートフォリオはもう一人の高次の自分であり、自己評価はメタ認知を持つこと」と(鈴木, 2007)は述べている。他の項目でも 4・そう思う の自己評価が 30%を超える結果であり、高次の自分が見え、自己の学習態度について認識されたものとする。情意領域である、主体的・自主的な学習態度の育成は、認知領域や精神運動領域へ影響を及ぼし、今後の学習活動全般へ作用する。

学習意欲がわいたが、4・そう思う、3・ややそう思うとで、95.4%はかなり高く、授業内容に興味を持って取り組んだことから意欲につながったと思われる。この意欲を継続できるようにしていきたい。

今回は、評定尺度を用いた自己評価表の検討が不足しており、認知・精神運動・情意各領域の項目が一様でないという不都合がある。このことから単純に結果を考察することでは信頼性が薄い。今後は改良して各領域の評価が信頼性のあるものにしたい。

2)設問による結果(3)自分が成長できた点からは、『知識が増え学びの態度が変化した』が最も多く、サブカテゴリの【学びの態度】では、(自分の意見を持つ)(一つのことを最後までやりぬこうとする意欲)(疑問に思ったことを調べないとむずむずするようになった)(授業で考えたことをメモするようになった)(創作意欲の発揮)など、考え方や行動の変化を、自分のことばで具体的に述べている。【知識が増えた】の内容としては(たくさんの援助方法があること)(生活習慣病の予防方法がわかった)など授業の目標到達ができたと思われる。次いで『コミュニケーションがうまくなった』であり、うまくなったに関する内容が(人に自分の意見を伝えることができるようになった)が最も多く(自分の意見を言えるようになった)という記録も多かった。(他人の意見を素直に聞けるようになった)(いろんな人とグループになって自分の人見知りはまだましだとわかった)など、これほどコミュニケーションがうまくなっていなかったのかと再認識した。

人間を対象とする看護職においては、対人間関係を結び、信頼関係を調整できる能力は必要不可欠な能力であり、まずは同年代の学友とコミュニケーションが図れることは重要である。学生がコミュニケーション能力の向上を意識できたことは、自信につながり今後の学習意欲に結びつくものとする。

『GWの意義』の理解が深まり、【GWの意義・役割】の中で(GWに積極的に参加できた)がもっとも多く、(GWの大切さがわかった)と述べている。これは最初にブレインストーミングを導入し、話し合いの4つの原則である①判断延期②自由奔放③質より量④批判厳禁を徹底して、GWをした。また、発言が苦手な学生も多いことから、沈黙のブレインストーミングといわれるブレインライティングの方法を取り入れた。テーマごとのGWで方法を変え、メンバーを変えて実施したことで多方面から考えることができ、GWの重要性に気づくことができたと思われる。

3)個人の学びのプロセス図解を科目の終了時に俯瞰することは、この活動を通じて学習者は自分の新しい意識を形成(林, 2004)することに有効であり、かつ看護教育においても自己の自立・自律の能力を育成(田島, 2009)し、自己教育力を伸ばす方法としてポートフォリオの活用が有効であったと考える。

田島(2009)は、思考においても行動においても自己の自立・自律の能力を育成することが教育において重要であると述べ、自己教育力を伸ばす方法として、ポートフォリオの活用が有効であると述べている。

学生は学びのプロセス図解を俯瞰し、ポートフォリオを視覚的にとらえることにより、自己の学びのプロセスを確認し、自己の学習意欲や主体的学習態度、自己成長に対する認識をしたものと考えられる。

今回、評定尺度の自己評価と設問による自己評価の結果から、授業を通して知識が増え、コミュニケーションがうまくなり、学習意欲がわき、考える力や視野が拡大したことがわかった。

このことが主体的学習態度を形成することに有効であることがわかった。

授業ごとの学びのラベル、ラベル新聞、コメントラベルや、最後の学びのプロセス図解から、学生の生のことばを聞くことができ、新聞作成や図解では、色、デザインで工夫をし、表現力が多彩であることを認識させられ、学ぶ喜びが生き生きと伝わってくることを実感した。

このような意識の変化を持続させ、昇華させていく学びの方法を、学生とともに向上させていくことは、教師である自分の喜びであり、自身の成長にもつながるものとする。

結 論

ラベルワークにより個人の学びのプロセスを図解し、これをポートフォリオで自己評価をすることにより、以下のことが明らかとなった。

- 1) 学生自らが学ぶ姿勢を自覚する学習姿勢など、主体的な学習態度を養うという情意領域に有効であった。
- 2) 学生は、コミュニケーション能力で自己の成長を認識しており、ラベルを用いて話すラベルトークが効果的であった。

おわりに

今回は、ポートフォリオ評価の自己評価から、主体的な学びの認識について考察した。自己の

学びが可視化できるポートフォリオで得られることは多く、このことは教師である自分の喜びにもつながり、学びの多い方法である。今後は学習意欲の向上を維持しながら、思考の変化から行動の変化につなげるように考えて実施していきたい。

参考文献

- 鈴木敏恵 (2006) ポートフォリオ評価とコーチング手法, 医学書院, 東京都.
- 田島桂子 (2009) 看護学教育評価の基礎と実際. 第 2 版. 医学書院, 東京.
- 永田美和子, 渋谷貞子 (2004) 課題別看護における授業効果の検討. 第 26 回日本創造学会研究大会論文集.
- 文部科学省ホームページ. 中央教育審議会大学分科会報告書. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm (閲覧日 2008 年 10 月 1 日)
- 森田恵子, 渋谷貞子, 永田美和子 (2006) コメントラベルを活用した授業効果の検討. 第 28 回日本創造学会研究大会論文集.
- 林義樹 (2002) 参画教育と参画理論. 学文社, 東京.
- 林義樹 (2004) 『看護の知を紡ぐラベルワーク技法』. 精神看護出版, 東京. pp156-160.

Original article**Effects of portfolio review using “Labels”
on independent learning attitude**

Teiko Shibuya

Department of Nursing, Faculty of Health Science,
Tsukuba International University

Abstract

“Label Work” was carried out in the class of Introduction to Adult Nursing. At the end of the class of every time, the students made a “Grouped-Label Newspaper” by using the records of what they had learned in the class. Furthermore, the “Comment Labels,” which consisted of the comments of peer-review “Group Work” presentations, were added to the “Grouped-Label Newspaper.” Finally, the students evaluated themselves by a “Portfolio Review,” which illustrated the learning processes using daily “Grouped-Label Newspaper.” The results reveal that the students find the direction of learning by the “Label Work,” develop an independent learning attitude throughout the “Portfolio Review,” and primarily recognize an improvement of their own communicative abilities. (Med Health Sci Res TIU 1: 117-126)

Keywords: Portfolio review; Label work; Independent learning attitude; Communicative abilities